

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 14 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520749

研究課題名（和文） 近現代フランス史における子ども像—実態と表象—

研究課題名（英文） Images and Realities about Children in French modern History

研究代表者

重松 知恵子（SHIGEMATSU Chieko）

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：40187349

研究成果の概要（和文）：(1)17～19 世紀の子ども向け読み物からは、子ども像の変化を見て取れる。そこには、伝統的家族から近代家族への変化などが反映されている。(2)都市化や工業化の進む中で生きた近代民衆世界の子どもたちは、義務教育制度の下、国民として組織化されていく。(3)総力戦としての第一次世界大戦は、子どもの生活にも大きな影響を与え、彼らに異例の早熟を強いた。(4)ナチス占領下の第二次世界大戦期には、子どもたちは人種や立場によって分断された。たとえばユダヤ系の子どもたちは、厳しい生死の境をさまよった。

研究成果の概要（英文）：(1) Images of children described in juvenile books in France 17-19th century, reflect the change of society and families: from traditional family into modern family, for example. (2) Children of the lower class, lived in the industrialization of 19th century, sometimes exploited at first, were incorporated as members of nation state in the end of the century by the compulsory educational system. (3) First World War, the first total war, affects all aspects of children's life. They were especially forced to be precocious. (4) According to race or political position, children were divided under the Occupation. Jewish children were particularly in critical condition between life and death.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、西洋史

キーワード： フランス史、子ども史、家族史、教育史

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者（重松知恵子）はすでに、『子どもと学校の世紀—18 世紀フランスの社会文化史』（岩波書店、2007 年）において、子どもに向ける大人のまなざし＝「子ども像」が変化するに伴い、家族や学校のあり方がどのように姿を変えていくかという問題を検

討していた。また、「第一次世界大戦とフランスの子どもたち」（『愛知県立大学外国語学部紀要』2010 年）においては、総力戦の下での子どもの戦争協力や、「英雄」となった子どもたちに関する分析を行い、フランスにおける第一次世界大戦の性格について考察した。

本研究は、この延長線上に位置づけられるものである。つまり、子ども史から全体史の構築をめざす試みである。子どもの姿を手がかりとして、19世紀後半～20世紀前半の近現代フランス史を再検討し、家族のあり方がどのように変化するか、という問題や、それぞれの時期の社会がいかなる特徴を有しているか、といった点を明らかにすることを目的とした。

歴史学の領域で、近代史・現代史については従来あまり行われてこなかった子ども史研究が、近年、いくつか興味深い成果をあげはじめている。たとえば第一次世界大戦下の子ども、といったことである。本研究は、そうした成果を積極的に紹介すると同時に、この分野におけるさらなる貢献をめざした。

それでも、本研究を開始するにあたっては、アプローチの方法をさまざまに検討した。というのも、ある時代の子どものイメージを抽出する方法は、古代史から近世史については確立されてきているとすることができるが、近現代については困難をとまなうからである。出来事が矢継ぎ早に展開し、おおぜいの人びとの運命をいっぺんに変えてしまうような時代、さらに、義務教育制度や社会福祉制度が子どもや家族に計り知れない影響を与えるような時代に、イメージ分析の手法は有効であろうか。

ともあれ、まずは手探りで研究を開始することにした。小説、児童書、自伝、英雄譚、教科書、子ども向けの歴史書など、子どもや家族の姿が興味深く描かれていると思われる各種各様のさまざまな読み物を収集し、そこから子ども像や家族像、社会の姿を明らかにする。そしてその時代の現実の状況について、これまでの歴史学研究の成果と照らし合わせて検証していく。このようなやり方で、近現代フランスにおける子ども史の研究を始めることにした。

2. 研究の目的

(1) 家族と子どものイメージの変化

17世紀から19世紀のフランスにおいて、子どもや家族が文学作品や子ども向け読み物の中でどのように描かれているかをまず検討する。そして、そこからは家族の変化や社会のあり方の変化をいかに見て取ることができるかを考察していく。

(2) 近代民衆世界における子ども

都市化や工業化を経験することになる19世紀のフランスにおいて、民衆の子どもたちをめぐる社会状況はいかなるものであったかをまず明らかにする。そしてそれが、時代が進むに連れてどのように変化していくことになるのかを検討していく。

(3) 第一次世界大戦とフランスの子どもたち
すでに研究を行ったテーマであったが、終戦と戦後に関わる新たな題材を加えて、この戦争がフランスの子どもたちに対し、どのような影響を与えることになるのかを、多面的に考察していく。

(4) 第二次世界大戦期フランスの子どもたち
敗戦とナチスによる占領の時代のフランスにおいて、人種や政治的立場の異なるさまざまな子どもたちがそれぞれ、いかなる状況におかれたかについて見ていく。ここでは「普通のフランス人」の子ども、レジスタンスや反体制の側についた子ども、ユダヤ系の子ども、そして、ドイツ兵とフランス女性との間に生まれたいわゆる「ボッシュの子」を取り上げる。

3. 研究の方法

本研究は主として、以下のような手順で行った。

(1) 上述したように、資料として用いたのは、各種の読み物である。具体的には、17世紀～20世紀の児童文学、19世紀の小説、20世紀の子ども向け歴史書などがメインの題材である。これらからまず、子どもや家族が以下に描かれているか、そのイメージを抽出していく。

(2) そのイメージが、実際の姿を反映していると言えるのか、あるいは、そのイメージの背景にいかなる歴史的事実を考えることができるかを、これまでの歴史学研究によって明らかにされてきたさまざまな成果と対比して検討する。

(3) その結果、どのようなことを指摘できるかを考察する。こうした方法によって、17～20世紀前半のフランス史に関し、新たないくつかの貢献を行うことができたと思える。その詳細については、以下で述べていきたい。

4. 研究成果

研究の目的に掲げた4つのテーマについて以下のように成果をあげることができた。

(1) 家族と子どものイメージの変化

シャルル・ペローやラ・フォンテーヌなど、フランス児童文学の端緒として知られている17世紀の子ども向け読み物を見ると、そこには、機知に富み狡猾な子どもの姿を見出せる。その背景には、子どもと大人の境界が明瞭でなく、時として子どもでも情け容赦なく厳しい社会へ放り出される17世紀という時代の現実があった。さらに、読み物に描かれる殺伐とした家族の姿は、捨て子や再婚が当たり前であった当時の世相を反映してい

る。そうした中で、たくましく生き残るための教訓が、この時期の子ども向け読み物には書かれていたのである。

ところが 18 世紀後半になると、素直で無垢な子ども像が好まれるようになる。そこからは、家族の情愛を重んじ子どもの教育に配慮する「近代家族」の登場を読み取ることができる。

さらに「純真無垢」な子どもは、フランス革命期の読み物にも登場するが、そこでは、波瀾万丈の物語の中で悲劇的最期を遂げる姿で描かれており、フランス革命の影響が色濃く反映されていると考えることができる。

子ども向け読み物が本格的に成長を遂げる 19 世紀、セギュール夫人は個性的な子どもを登場させて「近代家族」の時代の児童書の到来を告げた。他方で、ジュール・ヴェルヌやエクロール・マロは、地図を手に旅する子どもを主人公にした長編小説によって、フランスや地球といった地理的世界に子どもたちを誘った。また、つらい経験によって成長していく子どもが描かれ、ハッピーエンドともあいまって、今日にもなお継承されている児童文学の型が、こうして確立されたのである。

19 世紀はまた、ブルジョワの家庭において母親の役割が重視された時代でもあった。バルザック、フローベール、ヴァレーズ、ルナールなどの文学作品には、女性＝母性のジェンダーの壁が築かれたことや、その中で苛立つ母親が、我が子を虐待してしまう姿も描かれている。

(2) 近代民衆世界における子ども

ここでは 19 世紀の文学作品の中から、この時代に特有の民衆の子ども像を拾い集めた。まず、ユゴーの『レ・ミゼラブル』に登場する浮浪児である。彼らは、急速に膨張する近現代の都市にとりわけ特有の存在とすることができる。都市に人口が集中する中、劣悪な住環境と苛酷な労働が下層の人びとの家族の絆を崩壊させたのである。

農村では、質素で多忙ながら、以前よりは安定した生活がおくれるようになっていた。とはいえ、農村における教育の普及には、なお時間を要した。他方で、工業化の進展とともに、工場や炭坑では多くの子どもが雇われるようになった。しかし彼らは厳しい労働環境のもとにおかれて、身体をむしばまれていった。

それでも 19 世紀後半になると、国民の育成という観点から、民衆の子どもへの保護を目的としたさまざまな政策が行われるようになる。中でも義務教育制度とその徹底した施行が、民衆の子どもたちに愛国心を教え、国民国家の確立に大きな役割を果たすことになった。

(3) 第一次世界大戦とフランスの子どもたち

日本ではあまりなじみのない第一次世界大戦であるが、フランスでは大量の戦死者を出した「大戦争」である。まずは今日のフランスの子どもに、この戦争がどのように語られているのかを検討した。その結果、第二次世界大戦期の日本のような厳しい状況であったと書かれていることが判明した。

総力戦として戦われたこの戦争は、子どもたちの生活を大きく変えた。学校は戦争一色になり、カトリック教会も、祈りを通じた戦争協力を訴えた。慰問品作りや国債募集にさえ子どもが狩り出される一方、ドイツに対しては強い憎しみが語られた。また子どもたちには、父や兄が出征し、母親が働きに出たあとの家を守る大きな役割が課せられた。

子ども向け雑誌などでこの時期喧伝された「英雄的な子ども」像を分析していくと、大人顔負けの知恵者であるのに、澁刺さや生気を感じさせない子どもの姿を見て取れる。総力戦の重圧の中で、早熟を強いる環境が、早々と老成して死の影さえ漂わせる奇妙な子ども像を生み出したとすることができる。

子ども時代に終戦を迎え、大人の身勝手に痛烈に感じた経験を語る人びともいる。また親を亡くした 110 万とも言われる子どもにとって、戦後は厳しいものであった。

(4) 第二次世界大戦期フランスの子どもたち

最初に取り上げたのは、「普通の」パリ市民の子どもであった。フランスの国民国家が崩壊したナチス・ドイツによる占領期(1940-45)、一般のフランス人たちの生活を支えていたのは何より、家族・親族の絆であったことがうかがえた。

次に、レジスタンスや反体制の側について子どもたちについて検討した。ここではまず、「情報の共有」と「抵抗精神」がたとえば、多くの学生たちを鼓舞したことを明らかにした。また、「レジスタンスの英雄」の一人として知られているギイ・モケが、英雄として伝説化されていく過程には、1930~40 年代のフランス共産党の方針が大きな意味を持っていたことを検証した。

さらに、ユダヤ系の子どもたちを取り上げ、ヴィシー政権下でアウシュヴィッツへの子どもの移送がいかんに行われるようになったのかを考察した。同時に、ユダヤ系の子どもたちを匿うネットワークがフランス全土に設けられ、多くの子どもの命を救ったことも明らかにした。

最後に、「ボッシュの子」について検討した。ここでは、占領期にドイツ兵とフランス女性との間に生まれた子どもたちが、戦後、差別の中で苦しんだ事例をいくつか取り上げ紹介した。

本研究は、次の2点で、従来にない新たな成果をもたらしたとすることができる。

(1)多様な「物語」を題材に用いた歴史研究であるが、取り上げたのはいわゆる文学作品のみならず、児童文学や子ども向けの歴史の本、教科書や英雄譚など、はばひろい資料である。本研究はそれゆえ、文学、児童文学、教育学、歴史学など広汎な学問分野にまたがる学際的研究の一事例として位置づけることができる。こうした試みは、我が国でいまだほとんどなされていない。

(2)本研究は、「戦争と子どもとの関わり」や、「子どもの虐待」など、きわめて今日的ということのできる問題を取り上げ、その歴史的経緯をさぐる試みでもある。このような探究は、我が国の西洋史研究ではこれまで行われておらず、この点でも開拓的な意味を持っていたと考えている。

なお、本研究は、成果をわかりやすい形にまとめて、専門家のみならず多くの一般読者に提供することを最初からめざしていた。計画通り単著の形で公刊することができたため、社会や国民に向けて、広く評価を問うことができると思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計3件)

- ①天野(重松) 知恵子 (書評) 「前田更子『私立学校からみる近代フランス-19世紀リヨンのエリート教育』『史学雑誌』 119編第9号、査読有、2010、 98-105
- ②天野(重松) 知恵子 「第二次世界大戦期のフランスにおける子どもたち」『愛知県立大学外国語学部紀要』(地域研究・国際学編) 第43号、査読無、2011、191-213
- ③天野(重松) 知恵子 「19世紀フランス民衆世界の子どもたち」『愛知県立大学外国語学部紀要』(地域研究・国際学編) 第44号、査読無、2012、167-186

〔学会発表〕 (計1件)

- ①天野(重松) 知恵子 「全体へのコメント、ならびに、フランスにおける女子教育のあゆみ」ユーラシアの近代と新しい世界史叙述研究会、2012年10月27日、東京大学

〔図書〕 (計1件)

天野(重松) 知恵子 『子どもたちのフランス近現代史』、山川出版社、2013、177+19頁

6. 研究組織

- (1)研究代表者 重松 知恵子
(SHIGEMATSU Chieko)
愛知県立大学外国語学部・教授
研究者番号：40187349